

菊池寛『真似』について

小鹿原 敏 夫

(0) はじめに

『真似』は「新潮」大正 13 年 1 月号に発表された菊池寛による一幕三場の戯曲である。この作品はアッシジの聖フランチェスコを題材にしたもので、舞台設定は、場所が「アッシジの郊外」とあり、時が「千二百七十八年頃」とある⁽¹⁾。フランチェスコはアッシジの裕福な織物商の長子に生まれ、何不自由なく育ち、青年時代は放蕩も経験したが、回心を経て「修道士は自分の豎琴以外何ももつべきではない」と清貧に徹し社会に奉仕する生き方を見だし、フランシスコ修道会を創設したことで知られる。

菊池がこのキリスト教の聖者を題材にした戯曲を発表した大正 13 年は、それまで大正年間を通じて少しずつ増幅されてきた日本におけるキリシタン趣味がピークを迎えようとしていた年であった。菊池の親友、芥川龍之介は既に『奉教人の死』(大正 7 年)、『きりしとほろ上人伝』(大正 8 年) のようないわゆる切支丹物といわれる傑作を次々と発表していた。菊池自身も芥川龍之介とともに大正 8 年 5 月に長崎を旅行し、キリシタンの遺跡をたずねている。アカデミズムでは、姉崎正治や新村出に代表されるキリシタン研究が続々と出版され、一般の人々にも広く受け入れられていた。

菊池の『真似』では、農夫ジョバンニがフランチェスコとその一挙一動を真似ることで「偉い聖人」になろうとする姿が描かれる。フランチェスコはジョバンニに翻弄されるが、最終的に「(ジョバンニは) その浄らかなおろかさに依つて、神と共にある」という認識に至りジョバンニを祝福するのである。全集(1993)の解題によれば、大正 15 年 1 月に帝国ホテル演芸場で、畑中蓼波らにより初演されたとある。

(1) 日本における聖フランチェスコ伝の受容

19 世紀末に聖フランチェスコとその修道会の実証的研究に着手したのはフランス人のカルヴァン派牧師サバティエ (Paul Sabatier 1858~1928) である。彼は聖フランチェスコとその修道会に関する資料を広く渉猟した。そしてそれらを代表的な中世の伝記資料三点(「小さき花」「完全の鏡」「三人の伴侶の書ける物語」とともに編纂し、綿密な検討を加えた。そしてその成果に基づき『聖フランチェスコ伝』(Vie de Saint François d'Assisi 1893) を発表した。当初、聖人に対する実証的な研究態度はカトリック教会から不評を買ったが、サバティエの聖フランチェスコ研究は宗教史だけでなく、思想界にも大きな刺激を与えた。

デンマークの作家ヨルゲンセン (Jens Johannes Jørgensen 1866~1956) の『聖フランチェスコ伝』(1907) やイギリスのカトリック作家チェスタートン (G.K.Chesterton 1874~1936) の『アッシジの聖フランシス』(1923) などは伝記というよりも、聖フランチェスコを巡る著者の思索を述べたものといえよう。また聖フランチェスコの事蹟をより実証的な研究において進歩させたのはイギリスのフランシスコ会士カスパート神父 (Father Cathbert) による『アッシジの聖フランシス伝』(1912) であるといわれている。

これら 19 世紀末から 20 世紀初頭に刊行された聖フランチェスコに関する文献はいずれも大正年間に次々と邦訳されている。まずサバティエの『聖フランチェスコ伝』(1893) の邦訳が、英訳本 (1912) からの重訳で『アッシジの聖フランチェスコ』(中山 1915) として大正 4 年に出版されている。そしてちょうど大正の末年にカスパート神父の聖フランシス伝が深山衛夫の訳で『アッシジの聖フランシスコの生涯』(深山 1926) として出版された。

しかし聖フランチェスコの日本における紹介者として最も華々しい活躍を見せたのは、当時ゲテからトルストイまで幅広く翻訳を手がけていた久保正夫 (1894~1929) である。久保正夫は菊池寛、芥川龍之介、倉田百三などの一高における一年後輩である (芥川に対しては東京帝国大学においても一年後輩)。久保はサバティエが編纂した主たる中世の伝記資料のうち「小さき花」と「完全の鏡」を邦訳し刊行している。この久保訳『小さき花』(久保 1916) には姉崎正治が推薦文を寄せ、『完全の鏡』(久保 1919) には有島武郎が序文を書いている。もうひとつの中世資料「三人の伴侶の書ける物語」は八巻頼男によって大正 14 年に邦訳が刊行されている (八巻 1925)。加えて久保はヨルゲンセンの『聖フランチェスコ伝』(1907) を英語からの重訳で出版している (久保 1916)。

これら邦訳された多くの聖フランチェスコ関連文献のうち、特に久保訳『小さき花』は宗教に関心のある若い読者層に好評をもって迎えられたようだ。そして『小さき花』はキリスト教の枠を超えて、倉田百三の『出家とその弟子』(大正 5 年) に代表される大正年間の宗教文学ブームを後押ししたと考えられる⁽²⁾。

しかしこれらの邦訳が現れる前にも、芥川が在学していた頃の一高・東大の学生のあいだでは原書の聖フランチェスコの伝記が広く読まれていたようだ。芥川龍之介から井川恭宛書簡 (大正 3 年 (1914) 8 月 30 日) に「この頃フランシス上人の伝記を寝ながらよんでゐるが時々妙な事がかいてあるので面白くていゝ」で始まる一節がある。芥川が読んでいたのは英訳されたサバティエの『聖フランチェスコ伝』(1912) か、カスパート著『アッシジの聖フランシス伝』(1912) であったと思われる。どちらもこの書簡で芥川が面白がっているフランチェスコと弟子マッセオの逸話を記している⁽³⁾。

また多くの聖フランチェスコ伝を翻訳した久保正夫も、なぜ「フランチェスコ」ではなく「フランシス」と呼ぶのかについて訳者の註として以下のように述べる。

* 聖フランシス Saint Francis, Santo Francesco

私はイギリス風にフランシスといふ呼名がつねに耳なれてゐるために、イタリア語なるフラテといふ言葉を冠したときのほかは、フランチェスコと書かずフラ

これは久保も芥川と同様に学生時代から英訳で聖フランチェスコの伝記に親しんでいたことを示していると思われる。

久保正夫は大正 7 年には京都に移った。芥川はこの久保と倉田百三の二人とは馬が合わなかったようで、その様子が当時の書簡に窺われる⁽⁴⁾。菊池は「文壇交友録」(大正 14 年)に芥川を筆頭として六十人の知己を挙げているが、ここにも久保と倉田の名前はない。したがって芥川と親しかった菊池には久保との積極的な交流はなかったのではない。また『真似』で菊池は「フランシス」ではなく「フランチェスコ」というイタリア名を使用しているので、この作品の執筆に際し菊池が主として参照したのは、久保の訳書ではなく、中山訳の『アッシジの聖フランチェスコ』(中山 1915)であったのではないと思われる。

(2)『真似』におけるジョバンニについて

『真似』でフランチェスコにつきまとうジョバンニの姿は、聖フランチェスコ伝の「単純なジョバンニ (Giovanni)」と呼ばれた早世した弟子と、これも「単純なジネプロ (Ginepro)」と呼ばれた別の弟子の説話が合成されたものである。サバティエの『聖フランチェスコ伝』ではこの二人を並べて次のように記述している。

(聖フランチェスコが会堂を掃除していると) 一人の農夫が現はれた。彼はフランチェスコを見やうとして、牝牛と車とを野に置き去りにして来たのであつた。(中略) 実際彼は余りに単純過ぎてゐたのであつて、入団後彼は彼の師の一挙一動を、悉く模倣すべきものゝごとくに感じ、フランチェスコが咳をし、唾し、嘆息すれば、彼も同じやうにしたので、遂にフランチェスコはそれを知り、柔和に彼を譴責した。後彼は完全なものとなつて、他の托鉢僧達は大いに彼を嘆美したのであつた。間もなく彼が死んだ後に、聖フランチェスコは彼の回心を語ることを好み、彼を兄弟 Giovanni と云はずに、兄弟なる聖 Giovanni (ヨハネ) と呼んだ。Ginepro はその聖い愚行の故に、更に一層有名である。一日彼は病者を見舞にゆき、用事を云ひ付けられんことを乞ふた。患者は豕の足を非常に食ひたく思つてゐる旨を告白した。わが見舞人は即時に飛び出て、小刀を抜にし、近隣の林にゆき、其処に豕の一群を見付けて、その中の一疋の足を切り取り、彼の分捕品を誇りがに携へて、修道院に帰つた。／豕の所有者は狂気のやうに咆え猛つて、間もなく彼の後を追ひ駆けて来たが、ジネネプロは直ちに彼のところへ行つて、実は彼のために非常に善いことを為したのであると、極めて雄弁に指摘したので、彼に非難を浴びせ掛けてゐたその所有主も、忽ち容赦を乞ひ、その豕を殺して兄弟全体を招き、御馳走をするに至つた。

(中山 1915:192-193)

『真似』ではジネプロ（Ginepro）ではなく、ジョバンニ（Giovanni）が豚の足を盗み、病人に与えたことになっている。次は、怒った百姓が怒鳴り込んでくる場面である。

百姓一 大変どころぢやねえ。昼日中他人の家の豚を盗むなんて。お役人様に渡して牢屋へ打ち込んで貰ひたいだ。

フランチェスコ 本当に申訳ありません。どうぞ堪忍して下さい。私はどんな償ひでもいたします。どうぞ勘弁して下さい。（ジョバンニに）お前は、どうしてそんな恐しいことをしたのです。私達兄弟で、モーゼの第一戒を犯したのは、お前が初めてです。早く、皆さんにお詫びを云ひなさい！

ジョバンニ お師匠さま、病人の云ふことは何でも……

フランチェスコ まあそれはそれとし、早くおわびを云ひなさい！

ジョバンニ （不承々々に）どうも、俺が悪うがした。 （『真似』第三場）

ちなみにモーゼの第一戒は「汝わが面の前に我の外何物をも神とすべからず」（旧約聖書出エジプト記 20-3、申命記 5-7）である。フランチェスコが「汝盗むなかれ」を意図したのならば、それは第八戒である。

結局『真似』ではジョバンニが豚の足を盗んだ自らの非を認めたことで一件落着する。しかし『聖フランチェスコ伝』が記すジネプロは違う。彼は怒れる農夫に、小さな豚はほかの物と同様、神によってすべての人に平等に与えられているので、それを最も必要とする人間に分け与えるべきであると熱心に説いた。これを聞いて農夫は余計に怒りをつのらせるが、ジネプロがあまりに真摯に説得を続けるので、ついにはその農夫も根負けし、自分の豚一頭を殺し、料理して修道院に届けるのである。

ジネプロには他にも多くの逸話がある。例えばジネプロは貧しい人々が物乞いに来ると、いくら言い聞かせても、修道院の備品である家具や本まで与えてしまうので他の弟子達が困ったという（Cuthbert1914:144）。このようなジネプロの行動こそがフランチェスコの愛した「聖い愚行」であったと考えられる。

（３）『真似』における病人について

それでは次に『真似』でジョバンニに豚の足を盗むことをそそのかす病人はどのような人物なのであろうか。この病人はフランチェスコに対しては慇懃な態度を取り、ジョバンニに対しては横柄な態度を取る偽善的な人物として描かれている。病人の態度はフランチェスコが部屋から出て行くと一変する。

ジョバンニ 如何です、気分は少しでもよくなりましたか。

病人 べらぼうめ。こんな業病を病んでゐて、気分がよくなることなんかあるもんかい。

ジョバンニ 何処か痛むところはありませんか。遠慮なく仰しやつて下さい。

病人 痛いところどころか、身体中痛くない処なんか一個所だつてありやしない。

第一に、この足をさすつてくれ。

ジョバンニ この足は、たゞれてゐるだ。こんな汚い足さすれやしねえ。

病人 (半身を起す) 何だ、さすらない！ この土百姓め。それでフランチェスコの弟子か。さすれつたら、さすれ。
(『真似』第二場)

そしてこの病人は施しを行うフランチェスコの善意に対しても皮肉な見方をしている。

病人 みんな銘々に楽なことをするといふんだ。フランチェスコは、またフランチェスコで、俺達の世話をしていふ気持ちになつてゐるのだ。(『真似』第二場)

このような病人の横柄さと、忍耐を失ったジョバンニの態度は、サバティエの『聖フランチェスコ伝』に記された癲病収容所での奉仕に関する次の記述に依るとみられる。

さて実際、癲病者看護の唯一の目的のために任ぜられたものであるとは云へ、病者達が余りに横着で、感謝する代りに、恩人等に対して嘸いたり、時としては叱責したりする際には、この教団の兄弟達も、往々忍耐を失ふのであつた。

(中山 1915:201)

ところで『真似』ではこのような横柄な病人がジョバンニに豚の足を所望するが、サバティエの『聖フランチェスコ伝』ではジネプロに豚の足を所望するのは特に横柄な病人とはされていない。しかしそれよりも重要な相違は、『真似』の病人は、回心することがなかったのに対し、『聖フランチェスコ伝』ではフランチェスコのもたらす奇蹟により回心に至り、彼の歪んだ魂が救われるということである。

『聖フランチェスコ伝』の説話「悪霊に憑かれた癲病人」では、上述のような心僻んだ病人が、彼を看護する人々に常に罵詈雑言を浴びせていた。そこでフランチェスコはこの病人が悪霊に憑かれていることを認めたので、彼のために祈ってから自ら看護することを申し出る。

「わが子よ、汝は他のもの等で満足しないが故に、自分が看護するであらう」と。

「それは構ないが、しかし汝は彼等よりも良く看護が能きるであらうか。」「何でも汝の欲することをするであらう。」「大いに好し、悪臭に堪へ切れないが故に、頭の先から足の端まで自分を洗つて呉れ。」
(中山 1915:202)

そこでフランチェスコが、湯をかけながら彼の身体を洗い始めた。

すると見よ、聖フランチェスコがその聖き手をもつて、彼に触るゝ凡ての処、不思議なる奇蹟によつて、癲病が消え失せ、肉が完く健全なものとなるのであつた。そ

して肉が癒さるゝに準じて、この不幸なる人の靈魂もまた癒され、自己の罪惡に対する鮮やかな悲哀を感じ初めて、慘然として彼は哭いた……………（中山 1915:202）

フランチェスコが、特に病人の足を洗うことは、最後の晚餐を前にして弟子達の足を洗ったキリストの行い（ヨハネ伝 13:1-17）に倣うことであり、キリスト教では大きな意味を持つ。このことに関しては更に次章でハウスマンの戯曲に関連させて述べることにする。

（4）ハウスマンの戯曲『聖フランシスの小さな戯曲』と『真似』について

菊池と同時代の英国の戯曲作家ローレンス・ハウスマン（Laurence Housman 1865~1959）は聖フランチェスコの生涯を十八編の短編戯曲集『聖フランシスの小さな戯曲』（1922）にして発表した⁽⁵⁾。これらはサパティエの『聖フランチェスコ伝』に触発されたものである。最初の一編は、若いフランチェスコがアッシジの町で仲間と放蕩する姿を描き、そしてペルージャでの幽閉と、回心を経たフランチェスコが教会を建てる姿や、聖キアラとの出会い、教団の慈善事業に従事する弟子達の姿、教団内の葛藤、聖痕を受けるフランチェスコ、そしてフランチェスコの臨終などが描かれている。それぞれの戯曲の登場人物は三人から十人、舞台装置も最小限のもので、小規模なアマチュア有志の劇団が低予算で上演できるような形態をとっている。

菊池の京都帝大における卒業論文の題目は「現代の英国劇」であった。在学中には研究室にあった英語の原書を数百冊、読破したと豪語し、英語は得意中の得意であったという。さらに菊池は作家となっても英国とアイルランドの戯曲の最新の動向に深い関心をよせていた。大正 11 年には「英国近代劇瞥見」（『新小説』大正 11 年 4 月）を執筆している。このなかではグランヴィル・パーカー、オスカー・ワイルド、バーナード・ショオなどの十一人の主要な同時代の劇作家を簡潔に紹介しているが、その最後に以下のようにある。

この外にも、イスラエル・ザングウキル、ジョン・ドリングウオタア、ア・ノルド・ベネット、ローレンス・ハウスマン等の諸作家があるが、精しいことを知らないから、書かない。（『英国近代劇瞥見』菊池 1922）

つまり菊池は少なくともローレンス・ハウスマンの評判を大正 11 年には知っていたことになる。その二年後、菊池は大正 13 年 9 月から翌 14 年 5 月まで、文芸講座を徳田秋声や芥川と共に主催し、自ら「英文学講義—英国の近代劇」を講義した。この講義録は作家の片手間仕事ではない本格的なもので、後に山本修二（第三高等学校教授、京都大学教授）の補訂を経て『英国・愛蘭近代劇精髓』（大正 14 年）として刊行された。このなかにはローレンス・ハウスマンへの言及は全くないが、講義の準備のためハウスマンの連作戯曲『聖フランシスの小さな戯曲』（1922）を原書で読んだ可能性は大いにある。

そして両作品には偶然とは思えない類似点もあるが、それらはハウスマンも菊池もどちらもサバティエの『聖フランチェスコ伝』に依拠して（菊池の場合はおそらく中山 1915 を通じて）戯曲を書いたことにより多く起因すると考えられるだろう。ここでは次の二点について述べたい。

〔i〕病人について

まず（3）章でも述べたが、菊池は聖フランチェスコの説話「悪霊に憑かれた癲病人」に触発されて「病人」を造形したと考えられる。ハウスマンの連作戯曲では *The Lepers*（「癲病人たち」 Housman 1922:157-172）に登場する「半盲の癲病人」が同じ「悪霊に憑かれた癲病人」をモデルにしていると思われる。

ある日フランチェスコが弟子のレオとジネプロを伴い、世間から隔離されている癲病人たちの集団に施しを行うために赴く。次はフランチェスコと悪霊に憑かれた半盲の癲病人との会話である（Housman 1922:169）。

HALF-BLIND LEPER. How does a man share poverty?

FRANCIS. By love, and service, and obedience.

HALF-BLIND LEPER. 'Obedience'? Art thou ready to obey me?

FRANCIS. Very willingly, Brother.

HALF-BLIND LEPER. What I tell thee to do-thou wilt do it?

FRANCIS. If it may be done in charity.

HALF-BLIND LEPER. Does Charity wash feet?

〔私訳〕

半盲の癲病人：人はどのように貧しさを分かち合うのか？

フランチェスコ：愛と奉仕と従順によって。

半盲の癲病人：「従順」？ お前は俺に従うのか？

フランチェスコ：喜んで。兄弟よ。

半盲の癲病人：俺がやれと言ったことをお前はやるのか？

フランチェスコ：慈悲の名において。

半盲の癲病人：慈悲によって俺の足を洗ってくれるか？

この直後、突然フランチェスコは激しい悪寒に襲われる。それはこの半盲の癲病人が悪魔に憑かれているためである。また同時にこの魂の歪んだ癲病人がフランチェスコが回心する前の遊び仲間であったルドルフォであることが明かされる。それでもフランチェスコはルドルフォの足を洗おうとする。しかし弟子のレオは水の入った桶をフランチェスコに決して渡そうとせず、自分がルドルフォの足を洗うと告げる。実はレオはかつて俗世の若者であったとき婚礼の晩に、恋敵レオに敗れて嫉妬に狂ったルドルフォによって花嫁アントニアを毒殺されるという過去があった（「婚礼の宴」 Housman 1922:63-79 *The Bride Feast*）。ルドルフォはレオによる洗足を拒もうとするが、最後にはこれを受け

入れ、ルドルフォが感動のうちに回心を経験するところで幕となる。

『真似』の病人は、悪魔に憑かれているわけではなく、ただ要領のいいだけの病人である（業病であるとするが癲病人であるとは明言されない）。そして病人はジョバンニに足を洗うのではなく、足をさすることを要求する。ここではキリスト教に根ざした洗足という宗教的儀式的意味が消えている。

〔ii〕 ジョバンニとジネプロについて

ハウスマンの戯曲には「単純なジョバンニ」は全く登場しない。またジネプロは登場するが、豚の足を盗むエピソードは描かれない。しかしながらハウスマンのフランチェスコは「単純なジネプロ」（英語綴り **Juniper**）こそが自分の精神を最も深く理解した弟子であり、教会を建てるために自分の家の壁を崩して持ってくるというような愚行や、人を疑うことのない純真さを賞賛してやまない。まず『真似』の結末を挙げる。そして以下①～⑥はハウスマンの連作戯曲にみられるフランチェスコがジネプロを賛美した場面である。

『真似』の大団円は次のようになっている。

フランチェスコ （呆氣にとられてゐたが、やがてほのぼのと微笑す）おゝ私は、貴君に神さまのおゆるしを祈る必要はなかつた。貴君はその浄らかなおろかさに依つて、神と共にある。おゝフラテ・ジョバンニ！

（ジョバンニの肩に右の手をかける）

ジョバンニ おゝ貴君はその浄らかなおろかさに依つて神と共にある。おゝフラテ・フランチェスコ！

（フランチェスコの肩に右の手をかける）

——幕

以下①～⑥はハウスマン『聖フランシスの小さな戯曲』からの抜粋である（和訳は私訳である）。

① JUNIPER. Juniper, the fool, I am. -There's another for you. -That's what everybody calls me, who knows. And there's not a bigger fool in this world.

FRANCIS. Thank God for that, Brother. A good fool is a great work of mercy.

(Housman1922:101 The Builders)

ジネプロ：ジネプロという愚者が私です。—もうひとつどうぞ（教会をつくるための石を運んでいる）。—そのように私を知るもの誰もがそう呼びます。この世で私ほどの馬鹿者はいないのです。

フランチェスコ：神にそのことを感謝しよう、兄弟よ。良き愚者は神の慈悲のたまものである。

② (ジネプロの行いを賞賛して)

FRANCIS. Brother Juniper, come and let me lay my hands on thee.

[JUNIPER goes and kneels before him.]

FRANCIS. God made a great fool when He made thee, Juniper –for when He gave thee foolishness, He gave thee light also, and wisdom and understanding.

(Housman1922:153 Sister Clare)

フランチェスコ：兄弟ジネプロよ、こちらに来て私の手をお前に置かせてくれ。

〔ジネプロ フランチェスコの前に行き、ひざまづく〕

フランチェスコ：神はお前をつくるとき大いなる愚かさも備えられた。なぜならば神はお前に愚かさを与えられたと同時に、お前に光、知恵と思いやりを与えられたのだ。

③ JUNIPER. Being a fool's a great thing, if God finds a use for it.

FRANCIS. Aye, truly! [Then in a deeply moved tone] Dear fool, lay thy hand on me!

[JUNIPER does so with great reverence and tenderness.]

(Housman1922:219 The Chapter)

ジネプロ：愚者であることは素晴らしい。神様がその使い道さえみつけてくだされば。

フランチェスコ：まったくその通りだ！〔感情をこめた言い方で〕愛すべき愚者よ、お前の手を私にかけてくれ。

〔ジネプロは大いなる尊敬と優しさでフランチェスコに手をかける〕

④ (ジネプロについて語る)

FRANCIS. Where wisdom and prudence are the rule, fools are precious, Brother.

(Housman1922:245 The Brother Elias)

フランチェスコ：英知と慎みが支配するところでは、愚者の存在は貴重なのだ。兄弟よ。

⑤ (ジネプロに向かって)

FRANCIS. Praised be my Lord for all fools,

And namely praise for our Brother Ass;

The ways of the wise He over-rules,

And mighty things He bringeth to pass!

(Housman1922:248 The Brother Elias)

フランチェスコ：すべての愚者のために神を讃えよ。

すなわち我等のろまな兄弟のために。

賢者の方法を彼は超える。

そして素晴らしい事を気づかせてくれる！

⑥（死の床でジネプロに向かって）

FRANCIS:Thou art simple, Brother Juniper, but thou art wise.

(Housman1922:281 Sister Death)

フランチェスコ：お前は単純である、兄弟ジネプロよ、しかしお前は賢い。

上のハウスマン①～⑥はジョバンニとジネプロの違いはあるが、いずれも『真似』の大団円とよく似た信仰における愚者の礼賛である。しかし『真似』のフランチェスコが「貴君はその淨らかなおろかさに依つて、神と共にある。おゝフラテ・ジョバンニ！」とジョバンニを讃えているのは唐突であるとの印象を免れない。なぜなら『真似』に描かれたジョバンニは、ずるがしこい病人にそそのかされて豚の足を切り取っただけで、それ以外ではフランチェスコのことばを上手に真似るだけなのである。これらの行為だけでは、とうていフランチェスコからこのような賛辞を受けるに値するとは思えない。このフランチェスコの賛美にリアリティを持たせるために、菊池はジネプロの善意ある愚者としての逸話のひとつをジョバンニのものとして書き込むべきであったのではないだろうか。

（5）おわりに

『真似』において菊池はできるだけ理想化された聖人伝から遠ざかり、フランチェスコとジョバンニの姿を等身大か、むしろそれ以下に描写することを意図したようだ。正直なところ『真似』で描かれるジョバンニは劇中フランチェスコが言うような「淨らかなおろかさ」を備えているようにはとてもみえない。

それよりも師であるフランチェスコの姿はもっと退屈な道学先生のように描かれている。例えばフランチェスコは、豚の足を盗んだジョバンニを「お前は、どうしてそんな恐ろしいことをしたのです。」と責める。しかし聖フランチェスコ伝によると、回心した直後のフランチェスコは父親のものである織物を無断で売却し、その売上金を聖ダミアノ会堂の貧しい僧たちに与えた。そのため彼は父親から訴えられ廃嫡されているのである（中山 1915:104-105）。そのようなフランチェスコが善意で豚の足を盗んだジョバンニをただ恐ろしいことをしたとして責めるとは思えない。

また、フランチェスコとその弟子たちは従来 of 修道士のように隠遁の生活をするのではなく、自己を捨て、神を信頼しつつ貧しい人々や癩病人に奉仕しなければならないとされる。しかし陰気な信仰生活はフランチェスコの憎むところであり、神を信ずる者は賛美と喜びと感謝を表現することが求められた。したがってここに南欧のトルバドゥールの伝統につながる詩歌がフランチェスコの教団で尊重された理由があった。『真似』にはみられないが、ハウスマンの『聖フランチェスコの小さな戯曲』には豎琴を持ち詩歌を吟じるフランチェスコが描かれているのはこのためである⁽⁶⁾。

[注]

- (1) なぜ菊池が『真似』の時代設定を「千二百八十七年頃」としたのかは謎である。聖フランチェスコの生年には異論があるが（1182 年前後とされる）、没年は 1226 年とするのが定説である。
- (2) ○久保正夫は『聖フランシスの小さな花』（大正 5 年）の前書きに同書は草稿の形で多くの友人に廻し読みされていたと述べている（芥川と菊池は友人に含まれていないと思われる）。久保正夫と大正時代の宗教文学ブームの先駆けとなった倉田百三の間には交友関係があった。倉田百三が京都岡崎から久保正夫に送った書簡（大正 5 年 2 月 8 日『青春の息の痕』大東出版社、昭和 13 年）に久保訳『小さな花』を送ってくれたことに対する謝辞がある。またそれ以前の久保正夫宛の書簡（大正 4 年 12 月 4 日）で倉田は、自分が参加したばかりの京都山科の一燈園の組織、すなわち西田天香が主張する禁欲、奉仕、内省の信仰生活は聖フランシスの教団のそれと酷似していると報告している。倉田も久保と同様に「聖フランチェスコ」ではなく「聖フランシス」という英語式の名称を常に使用しているのが特徴である。
- 京都帝国大学を大正 9 年に卒業し大学院に進んだ頃を回想し三木清が以下のように述べている（三木 1948:59）。

宗教書はいつも何か読んでゐたが當時最も深い感銘を受けたのはフランチェスコの『小さな花』である。ヨルゲンセンのフランチェスコ伝を訳した久保正夫氏―天随氏の令弟―が東京から京都の大学院へ移つて来て、私たちの仲間に加はつたが、その久保氏も既に亡き人である。

- (3) Sabatier(1912:140-141) Cuthbert(1914:145)

- (4) ○東大在学中の芥川龍之介から井川恭宛書簡（大正 3 年（1914）3 月 19 日）より抜粋。

（山田耕作の音楽会で久保正夫に会って）

久米がゐたもんだから傍へやつて来ているんな話しをしてよはつた あいつの笑ひ方は含羞の笑だと思ふ やに甘つたるくつて胸の悪くなる所は甘草の笑の方がいゝかもしれない

- 芥川龍之介から恒藤恭宛書簡（大正 9 年（1920）4 月 28 日）より抜粋

どうも同志社なぞには倉田百三氏に感服する人が多かりさうな気がする 違つたら御免 … 久保正夫の講師は好いね 世の中はさう云ふものだ さう云ふものだから腹を立てる必要はない

- 芥川龍之介から恒藤恭宛書簡（大正 10（1921）3 月 7 日）より抜粋

同志社論叢拝受渡支の汽車の中でよむ心算だ 京都も好いが久保正夫などが蟠つてゐると思ふといやになる あいつの独乙語などを教つてゐると云つたつてヘルマン und ドロテアは誤訳ばかりぢやないか

（「ヘルマンとドロテア」は久保が訳したゲーテの詩集（久保正夫訳 新潮社、大正 7 年）。）

- (5) ローレンス・ハウスマン（Laurence Housman 1865~1959）は著名な詩人で西洋古典学者 A.E.ハウスマン（Alfred Edward Housman 1859~1936）の弟である。ローレンス・ハウスマンは挿絵画家として出発したが小説に転じ、やがて劇作家となった。菊池が「英国の劇壇に於ける小山内薫氏」（『英国近代劇瞥見』1922）と評したグランヴィル・バーカー（Harley Granville-Barker 1877~1946）と親しかった。『聖フランシスの小さな戯曲』（1922）の序文はグランヴィル・バーカーが寄せている。グランヴィル・バーカーは、シェークスピア劇において装飾過多な舞台装置とスター・システムを廃し、象徴的な舞台装置と無名の役者のアンサンブルによる演出を

重視したことで知られる。ハウスマンの『聖フランシスの小さな戯曲』（1922）もこの影響下にあるといえよう。ハウスマンのこの作品は劇壇で好評に迎えられたようで、翌年には同じスタイルで続編として『聖フランシスの弟子たち、初期フランシスコ会士の伝説の四つの戯曲』（Followers of St Francis: Four Plays of the Early Franciscan Legend 1923）を上梓している。なおハウスマンは同書の前書きで、前作と同様にサバティエの『聖フランチェスコ伝』を参考にこれらの戯曲を執筆したと述べている。

(6) Housman(1922:86 Our Lady of Poverty)

[参考文献]

全集 1993 :『菊池寛全集 1』文藝春秋、平成 5 年

菊池 1922 :「英国近代劇瞥見」（大正 11 年 4 月「新小説」）『菊池寛全集 22』文藝春秋、平成 7 年

菊池 1924 :「真似」（初出「新潮」大正 13 年 1 月号）『菊池寛全集 1』文藝春秋、平成 5 年

菊池 1925 :「英国愛蘭近代劇精髓」（大正 14 年 9 月新潮社刊）『菊池寛全集補巻』武蔵野書房、平成 11 年

芥川 1997 :『芥川龍之介全集、書簡 I ～IV、17.18.19.20』岩波書店、平成 9 年

生田 1976 :『久遠の聖者 アッシジの聖フランチェスコ伝』G.K.チェスタートン著 生地竹朗訳 春秋社、昭和 51 年

倉田 1916 :「歌わぬ人（一幕）」倉田百三著 大正 5 年、『現代日本文学大系 40』筑摩書房、昭和 49 年

倉田 1938 :『青春の息の痕』倉田百三著 大東出版社、昭和 13 年

中山 1915 :『アッシジの聖フランチェスコ』パウル・サバティエ著 中山昌樹訳 洛陽堂、大正 4 年

三木 1948 :『読書と人生』三木清著 小山書房、昭和 23 年

久保 1916 :『聖フランシスの小さき花』久保正夫訳 新潮社、大正 5 年

久保 1917 :『聖フランシス』ヨエルゲンセン著 久保正夫訳 新潮社、大正 6 年

久保 1919 :『聖フランシスの完全の鏡』久保正夫訳 新潮社、大正 8 年

深山 1926 :『アッシジの聖フランシスコの生涯』カスパート著 深山衛夫訳 帝国書院、大正 15 年

八巻 1925 :『三人の伴侶の著はせる聖フランチェスコの伝』八巻穎男訳 警醒社、大正 14 年

Housman 1922 : Laurence Housman, Little Plays of St. Francis. A Dramatic Cycle from the Literal Legend of St. Francis of Assisi. Sidgwick&Jackson Ltd London 1925 [1922]

Housman 1923 : Laurence Housman, Followers of St. Francis. Four Plays of the Early Franciscan Legend. London Sidgwick& Jackson Ltd. London 1923

Sabatier 1912 : (英訳本「聖フランチェスコ伝」) Paul Sabatier. Translated by Louse Seymour Houghton. Life of St. Francis of Assisi. Hodder and Stoughton. London 1912

Cuthbert 1914 : Father Cuthbert,O.S.F.C. Life of St.Francis of Assisi. Longmans, Green and Co. London 1914 [1912]

(おがはら としお・本学文学部非常勤講師)